

歌舞伎座の思い出 その2 - 変わった演出 -

1945年卒業

島 純一

歌舞伎座で、ただ一回しか上演されなかった演出と、普段と変わった演出が二演目あった。

順序不動だが、その一つは、「色彩間苺豆」。

この時は、舞台全部を使って、舞台奥からゆるやかに、下がってくるように、床を作り、土橋の下の川の部分を広くして、水布の上に流れの絵が描いてあった。しかし、一階の客には見えず、二階、三階の客には見られることになっていた。

この舞台装置は、伊東深水画伯によるものだった。伊東画伯は、朝丘 雪路の父親である。

「かさね」の衣装は、普段とは変り、派手な大柄の朝顔のような裾模様だった。そして、土橋の所に、捕手が二人出るのを止めて、大きな蝶を二匹出して、夜の蝶で無気味さを感じさせた。

「かさね」は、六世・菊五郎、「与右衛門」は、十五世・羽左衛門である。

花道は使わなかった。しかし、評判は、あまり良くなって、この時一回だけであった。

二つ目と三つ目は、忠臣蔵に関するもので、その一つは、四段目の次に、上演される、「道行旅路花婿」で、これは、忠臣蔵の原作には無く、四段目の暗い後にいれて、気分転換の為に何時からかは分からないが始まったものだ。

清元の文句に、「墨絵の筆に夜の富士」とあるので、六世・菊五郎が、富士山を墨絵にして、照明もいくらか暗くした舞台にしたが、これも評判が悪く、この時のみの上演となった。

もう一つは九段目で、これも、六世・菊五郎が、「戸無瀬」と「由良之助」を、二役演じたもので、最後の場面には、この二役が揃って出演するのにそれを無視したもので、昭和十八年六月に歌舞伎座で、上演したものである。この年月日は、講談社文庫の戸板康二の「六代目菊五郎」に記載されているので分るのだが、他のものは、私は、観劇しているが、年月日は、覚えていません。

それにしても六世・菊五郎は、それだけの力があつたにしても、変つたことを、三回もしているのは、不思議だと思っている。

しかし、私の知らない、大昔には、その時の力のある役者が、変つたことをしていたことも、多々あつたとも思われる。